

山形技術者倫理ニュースレター 第10号 (2026年7月)

発行：日本技術士会山形県支部倫理委員会

日本技術士会山形県支部の倫理委員会は、令和7年度活動の一環として、第2回ワークショップを開催しました。今回は、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で実施しました。本号は、当日参加できなかった会員の皆様にも内容をご紹介しますため、ワークショップの概要を掲載します。

令和7年度技術者倫理ワークショップ その2

第2回ワークショップ

日時：令和8年2月27日（金）13:30～16:30

場所：山形テルサ 研修室A（山形市双葉町1-2-3）

参加人数：24名（山形県支部会員21名、東北本部倫理研究委員会3名）

概要：湯澤支部長挨拶の後、大岩副委員長より「最近の不正事例」について紹介があった。その後、ワークショップのプログラムの説明を行い、5班（うち1班はオンライン）に分かれ、AI活用を題材とした架空事例（各班で一つ選択）をもとに事例確認を実施した。続いて、事前に用意した問い(4問)について意見交換を行い、最後に各班から成果発表を行って情報共有を図った。



湯澤支部長挨拶

(1)「最近の不正事例紹介」

説明：倫理委員会 大岩副委員長



説明状況

(2) ワークショップ

「設計・判断・運用・研究」各段階のAI活用を題材とした創作事例を用い、5班（オンライン1班）を編成して実施した。事例内容を確認後、事前に用意した問い（4問）について意見交換を実施、意見を取りまとめ、代表者が発表を行った。

① ワークショップのプログラム

時間	内容	目的
0～10分（10分）	事例確認	事例を読み、選択肢・討議の問いを考える
10～25分（15分）	討議Ⅰ（問い1～2）	参加者から意見を求め、問題点や論点を整理する
25～40分（15分）	討議Ⅱ（問い3～4）	参加者から意見を求め、自分ならどう行動するかなどを考える
40～55分（15分）	発表資料作成	意見をまとめ、整理して発表資料を作成
50～65分（10分）	発表内容の確認・役割最終確認	発表資料の内容を確認、発表者の最終確認
55～75分（10分）	発表準備	発表資料の準備
75～100分（25分）	発表	各班から発表（5班×5分）



ワークショップ状況(1～4班)



ワークショップ状況(5班)



発表

② ワークショップでの意見内容

各班がワークショップで問いに対して意見を出し合いまとめた結果は以下の通り。

班分け：1～4班（18名）、5班（オンライン）（6名）計24名

1班 選定事例C：AI 設計支援システムの誤判定 — 誰が責任を取るか

討議の問い	グループの結論・主な意見
1. AI 設計案に依存する場合の技術者責任はどこにあるか？	AI 案を評価し採用を判断する責任は技術者にある。
2. AI をどのように補完・監視すべきか？	AI の不足部分を確認し、人間が補完するとともに継続的な改善を図る。
3. A～D のどれを選ぶか？	B 案。AI はたたき台であり、法令適合や妥当性確認は技術者が担う。
4. 志向倫理の観点で望ましい行動は？	AI を適切に活用・改善しながら技術力向上につなげる。
◎技術者としての学び	多様な専門分野の意見交換により理解が深まった。

2班 選定事例C：AI 設計支援システムの誤判定 — 誰が責任を取るか

討議の問い	グループの結論・主な意見
1. AI 設計案に依存する場合の技術者責任はどこにあるか？	担当者だけでなく管理技術者や組織全体で責任を負う。
2. AI をどのように補完・監視すべきか？	前提条件や設計条件を整理しながら検証する。
3. A～D のどれを選ぶか？	C→B→D の順で対応し、状況に応じて複合的に判断する。
4. 志向倫理の観点で望ましい行動は？	AI を鵜呑みにせず、安全性を最優先に考える。
◎技術者としての学び	公衆の安全や社会への影響を考慮した判断が重要である。

3班 選定事例F：AI による設備監視 — 異常検知の扱いと技術者責任（他班と別事例）

討議の問い	グループの結論・主な意見
1. AI 設計案に依存する場合の技術者責任はどこにあるか？	技術者が相談できる組織体制の整備が必要である。
2. AI をどのように補完・監視すべきか？	現地確認、リスク整理、AI 判定精度の把握を行う。
3. A～D のどれを選ぶか？	C→D→B AI の限界を認識し、人間の判断を反映させる。
4. 志向倫理の観点で望ましい行動は？	AI 判定を現地で確認し、人間技術者が最終判断する。
◎技術者としての学び	AI の誤りや限界に気付ける技術者が重要である。

4 班 選定事例 C : AI 設計支援システムの誤判定 ― 誰が責任を取るか

討議の問い	グループの結論・主な意見
1. AI 設計案に依存する場合の技術者責任はどこにあるか？	最終責任は人間技術者にある。
2. AI をどのように補完・監視すべきか？	複数人による確認体制を構築する。
3. A～D のどれを選ぶか？	D 案。専門家の知見を活用し安全性を確認する。
4. 志向倫理の観点で望ましい行動は？	AI 技術の向上と若手技術者の育成を両立させる。
◎技術者としての学び	インフラの品質は長期的な視点で評価されることを再認識した。

5 班 選定事例 C : AI 設計支援システムの誤判定 ― 誰が責任を取るか

討議の問い	グループの結論・主な意見
1. AI 設計案に依存する場合の技術者責任はどこにあるか？	対外的には会社、社内的には担当者と上司が責任を負う。
2. AI をどのように補完・監視すべきか？	AI と人間の役割分担を明確にし、人間が不足部分を補う。
3. A～D のどれを選ぶか？	B 案・D 案。技術者が主体的に判断し活用する。
4. 志向倫理の観点で望ましい行動は？	AI をパートナーとして適切に活用する。
◎技術者としての学び	AI 活用と倫理的判断の両立が重要である。

【全体傾向】

各班とも、AI は有効な支援ツールである一方で、最終的な責任は技術者が負うべきであるとの認識で概ね一致した。また、AI の出力を鵜呑みにせず、現地確認や複数人による検証を行うことの重要性が共有された。さらに、AI と共存しながら、その限界や誤りを見抜くことのできる技術者の育成が、今後ますます重要になるとの意見が多く挙げられた。

ここで、問い 3. の選択肢は以下のとおり（3 班の場合、AI 案 → AI 判定）

A…AI の設計案を信頼してそのまま提出する

B…AI 案をベースに、自分で過去事例を踏まえて補正する (AI 判定)

C…上司に AI 案の限界を報告し、再検討を依頼する

D…設計チェック部門や外部専門家に相談して安全性を確認する

編集後記

本号では、令和 7 年度第 2 回ワークショップの内容を掲載しました。今回は、対面とオンライン併用の形式で実施し、参加者の皆様から概ね好評をいただきました。

今後も、**技術者倫理**に関するさまざまな話題を取り上げ、皆様のお役に立つ情報をお届けしてまいります。また、皆様からのご意見やご投稿も随時受け付けておりますので、お気軽にお寄せください。

（安達記）